

當作靖彦・中野佳代子著「外国語学習のめやすー高等学校の中国語と韓国語教育からの提言ー」
公益財団法人 国際文化フォーラム(TJF)、2013年1月1日刊を読む

外国語を学ぶ意義ーグローバルな資質・能力を身につけ、多様な人びととつながることができます。ー

1. 外国語を学んでこそ身につく力

外国語を学ぶ意義、とりわけまだ成長段階にある若い人びとにとってどのような意義があるかをあらためて考えてみたいと思います。

(1) グローバル人材としての素質・能力を育む

- ① 多様なことばと文化が共生するグローバル社会を生きぬいていくためには、世界の舞台で適切に他者と対話する力や、つきあっていく力を身につけることが必須です。2011年に日本経団連が実施したアンケート調査の1項目「グローバルに活躍する日本人人材に求められる素質、知識・能力」は、その一例を示しています。第1位：既成概念にとらわれず、チャレンジ精神をもちつづける能力、第2位：外国語によるコミュニケーション能力、第3位：海外との文化・価値観の差に興味・関心をもち、柔軟に対応する能力という結果には、時代のニーズを敏感に察知して対応することが死活問題である企業の見方が表われています。
- ② こうした外国語によるコミュニケーション能力や多様な文化に対応する能力は、外国語教育によってこそ育てられる力です。外国語教育が、教育全体においても極めて重要な役割を担っていることは明らかです。

(2) 言語力を鍛え視野を広げる

- ① 母語以外のことばを学ぶことは、それまで意識していなかったことばのしくみや成り立ち、文化の特質、人間・ことば・文化の関係などについての理解を深めます。また母語と比較することによって、自言語や自文化に対する理解が深まるとともに、複眼的な視点が得られ、視野が広がり、新たな世界観を手にするようになります。
- ② また、「ことば」が本来もつおもしろさ、豊かさ、楽しさだけでなく、外国語を使えるようになることで、世界に生きる多様な人びととコミュニケーションできる喜びを、新鮮な驚きをもって味わうことができます。加えて、母語を含む言語力の向上につながります。
さまざまな言語的・文化的背景をもつ人びととのやりとりは、あらためて「ことば」や「コミュニケーション」の重要性を認識させ、ひいては考える力を育てることにつながります。とくに母語でない外国語の学習や運用は、抽象的あるいは論理的思考力を伸ばすことに役立ちます。
- ③ 学校教育の早い段階から多様な外国語に親しみ主体的に学ぶことによって、生涯にわたって学習する基礎を培うことにつながります。

(3) 国際対話力を向上させる

①母語に加えて運用できる言語を身につければおのずとコミュニケーションの輪が広がり、国際的対話力が向上します。

多様な外国語のなかでも、さまざまな場面で英語が最優先されるのは、共通言語として使用される頻度が高く、PC やインターネットを含め、コミュニケーションツールとしての有効性が高いからです。日本人の英語力は、日本社会のあらゆる分野における発信力、受信力、交渉力を大きく左右するともいえます。

②文部科学省の外国語教育政策においても英語は最も重視されています。2011年6月に同省の「外国語能力の向上に関する検討会」が発表した「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(2016年度達成目標)では、「外国語には英語以外にも様々な言語が存在し、コミュニケーションの手段という意味ではそれぞれ重要であるが、英語が国際共通語として最も中心的な役割を果たしている言語のひとつであるという現状に鑑み、英語力の向上を図る方策を中心に」、日本社会を挙げてまず英語力向上に取り組むことが提唱されています。

しかし、外国語の能力が、日本の国家力あるいは企業力に大きな影響を与えることをもっと認識すべきであると考えれば、英語だけでは発信しる受信にしる情報はおのずと限られてくることも直視しなくてはならないと考えます。

2. 複数の外国語を学ぶことの重要性

(1) 多様な社会のニーズへの対応

各学校の特色や考え、各地域に固有な背景によって、英語以外のさまざまな外国語へのニーズがあるのは当然です。それに応えるためにも、制度上の後押しが必要であり、日本の学校教育のなかに複数の言語を学べる環境を本格的に作っていく努力が必要とされるのは、必然といえます。

(2) 多言語による情報収集力は日本社会の生命線

外交、防衛、経済は言うに及ばず、文化、メディア等々あらゆる分野において、複数の外国語に精通した人材を広く養成しておけるかどうか、意思疎通や情報の質と量に影響を与えるものであり、日本社会全体の力を左右することになると考えます。21世紀の日本が、多言語が息づくグローバル社会に対応し、かつ多文化社会を築こうとするならば、英語だけでは立ち行かないのは自明です。

(3) 複眼的思考や視点・多文化的資質の獲得

①英語以外の外国語を学ぶことで英語だけが外国語ではないことを知り、「ことば」のおもしろさを発見するとともに、英語との比較のなかで捉えていた日本語の特徴が、比較対象が変わることにより日本語に固有でないことも知ることができます。英語では得られなかった複眼的な思考や視点・視野の獲得につながります。また世界にある多様な言語、文化、民族についての認識を深めることもできます。

国際語としての英語はさまざまな文化的背景をもつ人びとの言語であり、言語と文化を一对一で対応させて学習することは難しい面もあります。それに対し、中国語、韓国語、あるいはその他の言語では、背景にある文化理解を深めやすいといえます。

②無論ひとつの言語の背景にある文化はどんな場合でも、単一文化として直線的に捉えるわけにはいきませんが、文化を比較したり、その異同を分析することを通じて、文化の可変性や多様性といった文化のダイナミズムを捉える学習が始まります。それによって、ステレオタイプな観念が緩和され、多文化的な視点を獲得することができます。

(4) コミュニケーションの深まりと広がり

国際共通語であるといっても、英語ができれば世界のどこにいても困らないわけではありません。日本で日常的に接する外国語も必ずしも英語ではないのです。英語話者の人口は世界の人口の4分の1でしかありません。ちなみに中国語を母語とする人は、世界各国にいる華僑や華人とよばれる人たちを含めて約12億人といわれています。この数字は世界の総人口の約17%を占めています。複数の言語を学ぶことで、英語に通じる相手であっても、相手の母語でコミュニケーションすることによって、より親近感が深まります。また英語話者ではない人びとともつながることができるのです。

P9 ~ 11

[コメント]

日本の外国語教育をリードする国際文化フォーラム(TJF)からの提言集。Can Doリスト付の好著。外国語に関心のある人、とりわけ外国語を教える立場にある方は、是非御一読を。

— 2013年3月2日 林 明夫記 —